

あとがき

神界劇は白山神行、国常立神行、大国主神行の三つでひとまず終了した。しかし、それは神の仕組みからみると前半部分であって、このあとに真の意味での宇宙革命が始められたのであった。私はそれを第一部、第二部というふうに区別しているが、後半部分は第二部という言い方では表現しきれない気もする。というのは、前半部分は旧支配体制内での変革であって、あくまでも乗っ取り犯父神の枠内での変革劇にすぎないものだったからである。第二部の後半部分こそが真の意味での革命であって、それこそが旧支配体制を打破してまったく新しい秩序を築き上げていく性質の仕組みなのである。ここにはもはや劇といった雰囲気はない。

第一部のほうは、確かに神が仕組んだ劇を演じているような実感があつた。しかし第二部のほうは、その劇そのものを打破していくものなのである。この第二部の宇宙革命に関しては、人間に明かすことが許されない宇宙上層部にかかわるものなので、それそのものをドラマとして発表することはできない。「根元への道」シリーズでは、その名のとおり根元界へ至るまでのドラマであって、それ以上語る必要のないものである。本書はその枠を少し出た内容になってしまった

が、それは私の側に宇宙に対する理解が不足していたから、その分を付け足さなくてはならなかったということなのである。

神界劇第二部に關しては、第一部に引き続いて日本で行われた神行についての記録を、地球レベルで発表する以外にない。各神界からいただいた「おことば」が中心になるはずである。平成五年末の段階で第二部の神行は、スサノヲ（ツクヨミ）神行、天照神行、丹生都神行、龍宮神行、父神神行、空の神行までが終了しており、第一部で行われた白山神行のやり直しが、三分の二まで進行したところで中断している状況にある。

第一部の三つの神行は、宇宙革命のほんのつかかりであつたにすぎず、新体制のためには、改めて真の神界再建のための神行がなされなくてはならなかった。第一部の仕組みは、真の变革からみれば偽物だったと言ってもいいようなものであつて、それこそ神界劇としかいいようのないものだったのである。なぜかと言えば、旧支配体制を支配していたのは父神とはいえその実体はオロチであつて、この魔物の体制は全宇宙規模で何代も続いてきており、神界劇第一部は体制内变革がめざされているだけの仕組みだったからである。それこそオロチの計画したドラマであつたにすぎない。

ところが变革は、宇宙行が進行していくにつれてその意味を変えはじめた。体

制内変革であつたはずの仕組みが、体制そのものを変革する真の革命に發展していったのであつた。それは神々すら予想しなかつたほどの驚異的なものであるが、このことの真実を語ることは人間にはとても無理である。人間によって宇宙革命が成し続けられていくといふものの、その舞台は宇宙外宇宙にあるために、人間の理解が届かないからである。人間としてはそれを地球レベルで語る以外に表現のしようがないわけだし、語るにしてもわれわれが住んでいる宇宙がせいぜいであろう。自分たちの宇宙世界すら満足にわからない人間に、宇宙外宇宙のことを話してみたところで、あまり意味がないのではあるまいか。真理を見極めたい者は、みずから宇宙の奥へ昇って行くしかないのである。

神の仕組みは本シリーズで発表してきた神界劇からはるかにかけ離れていつてしまい、せっかく苦勞して書き続けてきたものが無意味なものになつた思いがするほどである。しかし、第一部が成し遂げられてはじめて第二部の真の革命が成就するわけだし、その部分こそが人間の求道生活の本舞台でもあるわけなので、その価値が減ずるとは思えない。だけれども結果としては、第一部の内容とはまったく違ふ神界が現れるわけで、本の内容が必ずしも新体制にふさわしいものとは言えなくなる苦しさはある。ましてや第二部の詳細を語ることができないとあつては、欲求不満が起きそうな気もする。しかし、新体制が確立した暁には、

新しい神界の様子を改めて紹介しておくということとで補いをつけられたいわけ
で、終わったことをおしんだり、悔やんでいても仕方がない。

神界劇が変化したことにともなつて、本書で取り上げた求道者群像にも異変が
起きた。十二名のミコトモチを育成する努力をしてきて、その様子をドラマ仕立
てにして発表したわけであるが、神界の神々が魔物とのからみで変貌していくに
つれて、人間のミタマも魔物の相貌を現しはじめ、奥に封じられている真のミタ
マを目覚めさせるためには、上つ面の魔的な呪縛を解かねばならない、という余
分な作業が必要になつてきた。このことは第二部に入ってから判明したことであ
つて、本書で取り上げた以降に出てきた問題であつた。そのためその難題がク
リアできなくて、光泉堂グループから離れてしまった求道者も何名か出てきてい
る。

しかしそれはそれ、求道というものに大きな変わりがあるわけではない。何を
信じてどう生きるかは個人の自由であり、権利でもあるので、この道を行くこと
だけが正しいなどと言うつもりは毛頭ない。道は人間の頭数ほどある。私が説い
ている道は、大きく分けて五とおりの道の一つであるにすぎないし、この道を
通るにしたところであるんな取り組み方がある。どうしなければ行かないとい
う決まりきつた形があるわけではないし、道がまっすぐであることのみが正しい

とも断言できない。別な道へ寄り道する必要だつてあるかもしれないし、道草をくつたほうが楽しいし、いろいろな経験を積むことが、この宇宙表現世界を生きる意味でもあるのだから。

光泉堂に集う求道者たちに関しては、本書以降は「光泉堂だより」に求道者本人が執筆する形へと発展しており、私の一方的な悪態文章を打ち消して、それぞれがあざやかな求道ぶりを示してくれている。今後は彼らが活躍する舞台となるわけで、指導者としてこれほどうれしいことはない。そして、本書以後の神界革命については、月々の最新情報として平成四年四月から、「光泉堂だより」に発表され続けている。

佐田靖治